

鈴木胤の日本語認識：

『言語四種論』『雅語音声考』の「心ノ聲」「心アル音聲」「心ナキ音聲」を追究して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 趙, 菁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7488

鈴木 胤の日本語認識

—『言語四種論』『雅語音声考』の「心ノ聲」「心アル音聲」「心ナキ音聲」を追究して—

国際社会環境学専攻

趙 菁

Suzuki Akira's Perception of the Japanese Language

—Exploring the Terms "kokoro no koe", "kokoro aru onsei" and "kokoro naki onsei" in the Treatises Gengyo shishuron and Gago onjouko—

Jing ZHAO

ABSTRACT

The objective of this article is a reexamination of the meaning of the term "kokoro no koe" appearing in Gengyo shishuron and the terms "kokoro aru onsei" and "kokoro naki onsei" appearing in Gago onjouko as well as a study of the relationship of both works.

This will also lead to a clarification of Suzuki's unique way of thinking about the Japanese Language and furthermore provide a gateway to understand the circumstances under which his conception of language could develop.

In Gengyo shishuron the term "kokoro" in the expression "kokoro no koe" refers to the emotional activity of the human being at the time of forming his words. However, in the expressions "kokoro aru koe / kokoro naki koe" in Gago onjouko "kokoro" refers to sounds generated by all natural objects in general and is related to the appearance or meaning of these objects. That is, those that have this relationship are referred to as "kokoro aru onsei" and those that do not have this relationship are referred to as "kokoro naki onsei".

By clarifying that the usage of the expressions "kokoro no koe" and "kokoro aru koe / kokoro naki koe" can be distinguished on the different levels of "structural" and "phonetic" this articles shows - in contrast to the common perception that Suzuki's "kokoro" equals "meaning" - the specific richness of the usage of this term.

KEY WORD

kokoro no koe, kokoro aru koe, kokoro naki koe.

序 論

鈴木胤（宝暦14年<1764>～天保8年<1837>）は尾張藩に生まれ、若くして荻生徂徠門下の市川匡の門に入り、のち（寛政四年<1792>）本居宣長の門人となり、晩年には藩校明倫堂の国学教授となった。主著である国語学の三部作『言語四種論』『活語断続譜』『雅語音声考』が後の学者に与えた影響は大きい。現代でも彼の『言

語四種論』における品詞四分類と『活語断続譜』における活用研究は一部の国語研究者に注目され、評価されてきた¹⁾。本稿は音声と言語構造について論じるつもりであるので、『活語断続譜』には触れず、『言語四種論』と『雅語音声考』を中心に、先行研究を踏まえながら彼の言語意識を探ることにする。

胤は『言語四種論』において日本語を体ノ詞、形状ノ詞、作用ノ詞、テニヲハの四つに分類して、

そのうち万国語（ここでは中国語を指している）に優れたところとしてテニヲハを評価すべきことを主張し、「心ノ聲」と名付けた。この「心ノ聲」については「心の直接的な表現で、客体化、概念化の作用を含まぬ意味」^{註2}とする時枝誠記（1950）の解釈がある。本稿はその論を尊重した上でさらに解説を付け加えようとするものである。

『雅語音声考』は言語と音声の関係について書かれた書であり、ここで胤は四項目を設けて音声の意味を解き明かそうとした。胤は、言語とは則ち音声であり、その音声には形があり、姿があり、心があると述べ、またこのような音声は「心アル音声」と「心ナキ音声」に二分類できるとした。「形、姿、心」の「心」と「心アル音声心ナキ音声」の「心」は同じ意味で考えていいか、また「形」「姿」「心」と「心アル音声」「心ナキ音声」のそれぞれがどんな意味を持っているかについて考えていきたい。ここの「形、姿、心」については、「形」は体ノ詞で、「姿」は「形状ノ詞・作用ノ詞」で、「心」は「テニヲハ」であるという島田昌彦（1992）の論がある。また、尾崎知光（1983）は「有意的音声」と「無意的音声」で、「心アル音声」と「心ナキ音声」を解説した。本稿ではこれらの論を踏まえ、「形、姿、心」及び「心アル音声」と「心ナキ音声」の意味をより具体的に考察していきたい。

1803年『言語四種論』と『雅言音声考』の原形が合冊され本居大平に送られた。1816年『雅言音声考』の刊本ができ、1824年『言語四種論』の刊本ができた。両著書には「構造」と「音声」という視点の違いはあるものの、根本的な言語理解に相異は見られない。本稿は『言語四種論』の「心ノ聲」、『雅言音声考』の「心アル音声」と「心ナキ音声」の意味内容の再確認すること、また両著書の関連を考察することにより、鈴木胤の日本語に対する独自の考え方を明かにし、彼のこのような言語意識が成り立つに至った経緯を明らかにしようとするものである。

1 『言語四種論』と「心ノ聲」

『言語四種論』は鈴木胤が40才の時その底本を作り、61才でその刊本を出した。彼の言語意識が見える重要な著作の一つと思われる。

鈴木胤は日本語を次のように品詞分類している。（ ）内は筆者

体ノ詞	（名詞）
形状ノ詞作用ノ詞	（形容詞、動詞）
テニヲハ	（感動詞、副詞、接頭語、接続詞、助詞、助動詞、活用語尾）

その分類は『言語四種論』の目録にはっきり示されている。

言語四種論目録

○言語ニ四種ノ別アル事 ○体ノ詞ノ事 ○形状ノ詞作用ノ詞ノ事 ○テニヲハノ事 ○言語ノ根源又四種ノ詞相生スル次第
右言語ノ四種ニワカル、事ハ、大方万国ノ言語ミナカハリナシ、但シ外国ハ、我御国ノ如クナル精シキテニヲハナキ故ニ、タゞ其趣ノミノ別チナリ、我御国ノハ、テニヲハニテ其姿イトサダカニ別シタリ、委シクハ本書ヲ読テ知ベシ
（『百三十年記念 鈴木胤 鈴木胤顕彰会 1967 327 ページ）

上の目録にある「万国語」とは中国語のことを指している。中国語には語形変化がない。日本語の「テニヲハ」に相当する体系もない。これは現在の視点から考えると言語系統の相違に関する問題である。日本語はその「テニヲハ」によってしっかり秩序立てられていたと胤は『言語四種論』の冒頭ではっきり述べている。これは『言語四種論』全体の主旨とも考えられる。胤は、「体ノ詞」を語形変化がないことから「動カヌ詞」ともいい、また語形変化がある「形状ノ詞」と「作用ノ詞」を一つに合わせて「用ノ詞」、また「働ク詞」「活用ノ詞」「活語」ともいっている。ここで使われている「動カヌ」「働ク」などの文字からは、言葉その形態、機能によって品詞分類しようとする

る胤の意志がうかがわれる。彼のこの分類意識は、とくに彼がその基礎と認識した「体ノ詞」と「テニヲハ」の項目から詳しく伺える。

品詞四分類の中の最初の「体ノ詞」の説明箇所では、

体ノ詞ヲニツニ別クレバ、形アル物ト形ナキ物トノ違ヒアレド、総テ物ニテモ事ニテモ、形状ニテモ理ニテモ、何ニテモ、一方ニ定メテ指シ呼ブ名目ノ詞ハ皆是ナリ

(『鈴木胤』 330ページ)

と「体ノ詞」を、形のある物と形のない物という区別はあるが、すべての事物を称するときの言葉と定義した。この中には物の名称だけでなく、物の形、動きのことまでも含まれる。また、「用ノ詞」(「形状ノ詞」「作用ノ詞」)は「体ノ詞」と「テニヲハ」から成立するとしている(例えば、「青シ」の「青」は「体ノ詞」で、「シ」は「テニヲハ」)。これは胤の言語構成論(総ての語が「体ノ詞」と「テニヲハ」からできたもの)の基礎になると思う。「体ノ詞」が言語系統の基本的な位置に置かれていることから、品詞分類の原理を設ける胤の構想の一部がうかがえる。このような「体ノ詞」の項目の最後に、数詞の助数詞をテニヲハとして考えた箇所があった。胤がテニヲハが数詞(体言)にも働くことを指摘した理由は、日本語の数詞の特殊性を強調すると同時にテニヲハの日本語における位置を一層高めることにあったと思われる。これについては詳しくは筆者の拙稿「鈴木胤の数詞研究と副詞—『言語四種論』の「体ノ詞」と「テニヲハ」をめぐって」(『文莫』No.22 1998)を参照されたい。

すべての語を「名目」と「テニヲハ」からできたものとするのが胤の品詞論の基礎である。そして、名目とテニヲハの結合物として「形状ノ詞」と「作用ノ詞」が発生したと胤は考えている。胤が『言語四種論』において最も訴えたかったのは日本語におけるテニヲハの重要性である。胤がいうところのテニヲハは、現在の「助詞」に限定される単一的な概念のものではなく、むしろ宣長が『てにをは紐鏡』で主張した、文全体を繋ぎ合わ

せるというものに相当する。胤はテニヲハを6分類しているが、その中には、助詞の他に感動詞、接頭語、接尾語、副詞、接続詞、助動詞なども含まれている。

- 独立タルテニヲハ (感動詞、接頭語)
 - 詞ニ先ダツテニヲハ (副詞、接続詞)
 - 詞ノ中間ノテニヲハ (格助詞、接続助詞、係助詞、副助詞)
 - 詞ノ後ナルテニヲハ (終助詞、助動詞)
 - 活語ニツケルテニヲハ (活用語尾)
 - 詞ノ跡ヲ承テキレモシ、又働キテ下ニツヅキモスル事。活語ノ終リノテニヲハノ如クナルアリ、其スワル韻ノ必第二第三トニカキル事。活語ニ同ジク、其ココロノ形状ト作用トニワカルルコトモ、大方ハ同ジ。(助動詞)
- (『鈴木胤』 342~344より抜粋)

それらを概観してみると未だに連歌論書の「掛けてには」のような雑然とした叙述であり、すでにテニヲハを助詞・助動詞として秩序立てている梅井道敏の『てには綱引綱』(1770)、富士谷成章の『あゆひ抄』(1778)より後れをとっているようである。しかし、胤の独自のテニヲハ理論は、その雑然としているように見えて、逆に極めて整然としているところがある。胤はテニヲハを「心ノ聲」と称し、「心ノ聲」を基本として6種類のテニヲハを一貫して捉えていた。

『言語四種論』の「テニヲハノ事」の冒頭で、
テニヲハハ、モロコシニテハ語聲、又語辞、又助辞、又嘆辞、又発語辞又語ノ余聲ナド云類ヒニ総ベテ當レリ。辞ハ辞気トモイヒテ、心ノ聲ナリ。

(『鈴木胤』 340ページ)

と述べて、漢語文法と比較しながら、日本語の「メデタキ」事を主張する意図でテニヲハの理論を展開した胤は、中国語の語聲・語辞・助辞・嘆辞・発語辞・語ノ余聲と比較し、文中の語の関連性と文全体の「雰囲気」を最もよく表す部分として、テニヲハを「心ノ聲」と称した。この「心ノ聲」については先に述べた時枝誠記の論(1950)「心の直接的な表現で、客体化、概念化の作用を

含まぬ意味」がある。この解釈を踏まえ、よりテニヲハの機能の多様性を重視する観点から「テニヲハ」を「人間の心の働きがそのまま言葉として現れたもの」と理解したらどうだろうか。

「テニヲハ」の最初に掲げられた「独立タルテニヲハ」には、次のような語が挙げられている。

ア、アハレ、アワヤ、アヤ、アナ、アナヤ、ヤ、ヤヨ、ヲ、イナ、ヨ、ウ、幾、何、誰
【此三ツ共ニ不定ナル物事ヲウタガフ声ナリ、ナオテニヲハヲソヘテ活用イトオホシ】

(『鈴木胤』342~343ページより抜粋)

現在の品詞分類では、これらはほぼ感動詞に相当する。また「幾」「何」「誰」は現在は疑問代名詞或いは不定数詞として扱われている。胤はこれらを最も純粋なテニヲハと考え、以下でそれをテニヲハの起源として論じている。

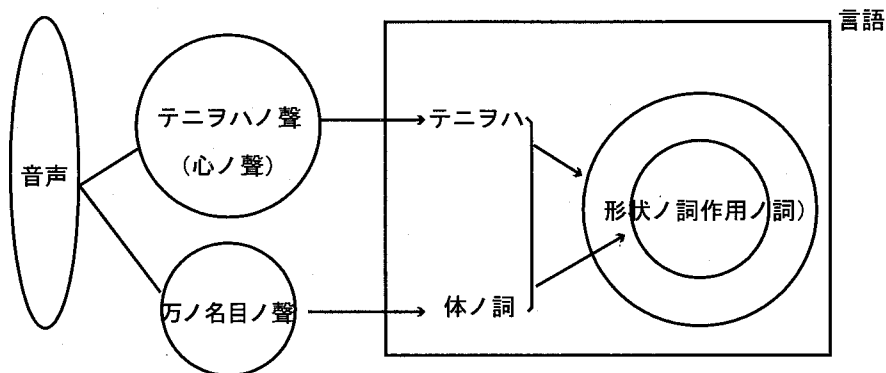
是ラ本ヨリ三種ノ詞ノ類ニアラズ、又詞ニツラナルテニヲハノ類ニモアラネドモ。人ノ心ノ聲ニアラハルニテ、テニヲハノ本体ナリ。サテカク独立タルテニヲハナル故ニ、転シテハ体ノ詞トモナリ。又種々テニヲハヲ添テ活語トモナルナリ。

(『鈴木胤』343ページ)

ここでは、はっきりとこの種のテニヲハを「詞」及び他の「テニヲハ」とは別扱っている。「人ノ心」が「聲ニアラハ」れたものだという胤の音に意味をもとめる言霊思想的なものがテニヲハの解釈に現れている。これこそ、「独立タルテニヲ

ハ」が「テニヲハノ本体」として位置付けられる理由である。また「独立タルテニヲハ」は、「体ノ詞トモナリ」「活語トモナル」機能性も豊かで、テニヲハの中でもその土台となる語群である。この「独立タルテニヲハ」の一部は、『雅語音声考』(鈴木胤1816)においては、「声ヲ以テ声ヲ写セル」の「人ノ聲」そのものからできた言葉に相当する。このような言葉こそがテニヲハの基本となると主張した胤の意図は、人間が発話の際に、心の動きをそのまま外界に表現するというを示すことにあるのではないか。またテニヲハが他の品詞が成り立つ基礎となるのは、万物に対する人間の心の動きが言語を形成することを支配しているとしているのではないだろうか。

「言語ノ根源又四種ノ言語相生ズル次第ノ事」
人ノ心ノ動ケルサマ音声ニアラハルハ、テニヲハノハジメ也、サレバテニヲハノ詞ノ骨髓精神ニシテ言語ノ大宗ナリ、カクテ其音聲ヲ以テ万ノ物事ニ名目ヲツケテシルシ別ツ、コレ体ノ詞ノハジメナリ。体ノ詞ヲテニヲハヲ以テ貫キ連ネハタラカシ用ル時、テニヲハト体ノ詞トツニ合テ、二種ノ詞トナル、コレ形状ノ詞ト作用ノ詞トノハジメナリ。シカレバ、四種ノ詞ヲ本ニ反リ離チ見レバ、タダテニヲハノ聲ト、万ノ名目ノ聲トノニツナリ。テニヲハノ聲ハ、我心ノサマヲワカチアラハシ、名目ノ聲ハ、万ノ物事ヲ別チ顕ハス物事ヲ聲ヲ以テ別トスルニハ聲ヲ以テ其サマ



ヲウツシカタドル事アリ。

（『鈴木胤』347ページ）

これによると、人の心は音声に表れるが、それがテニヲハの原点である。テニヲハは言語の基礎、中心である。また、音声から万物はその名称を付けられ、それが体ノ詞の初めとなる。音声からできた体ノ詞とテニヲハがあわせて用いられる時、それは一つのものに結合され、これが用ノ詞の初めである。

このように、『言語四種論』は語をその形から平面的に分類するのでなく、語を形成する基本のようなものを明らかにし、その結合や構成によって基本的な語の性質を示そうとするものとして書かれたのであると、筆者は理解する。ここに日本の国語学者による言語研究を言語構造研究に発展させた胤の考えがうかがわれる。

人の心の動きとしての「テニヲハ」が「体ノ詞」と共に「形状ノ詞」「作用ノ詞」の構成をするという胤の主張からは、物事の根本を追究するという胤の意識が彼の言語認識に深く影響していることが察知できる。この意識はまた『雅語音声考』にさらに強くなされている。

胤のこの言語分類意識を図式にすると次のようになる。

2 『雅語音声考』

(1) 「音聲ニ形アリ姿アリコヽロアリ」

『雅語音声考』は『言語四種論』とほぼ同じ時期に書かれた本である。この本において胤は音声を「鳥ケモノヽ聲」「人ノ聲」「万物ノ聲」「萬ノ形有様意シワザ」の四つに分類している。

上の四種類の声を紹介する箇所の前に、胤は「言語ハ音聲ナリ音聲ニ形アリ姿アリコヽロアリ」と書いている。ここでの「形」「姿」「心」をどのように理解したらよいのだろうか。島田昌彦(1992)にはこれを、「形」すなわち物事を表す「体ノ詞」(名詞)があり、「姿」すなわち物事の様相を表す「形状ノ詞」「作用ノ詞」があり、「ココロ」すなわち人間の精神を伝える「テニヲハ」があると論じた。筆者は島田昌彦のようにこの

「形」「姿」「心」を品詞分類と考えるより、「聲」が何に反映されるかの違いと考えたほうが胤の意図により近いではないかと思う。

ここでいう「形」と「姿」は、本文の他の箇所でははっきり区別されていないので、とりあえず同じものとして扱うことにした。胤は四種類の声のうち「鳥ケモノヽ聲」「人ノ聲」「万物ノ聲」という三種類の声を、ただ「声ヲ以テ声ヲ写セルナレバ殊ニ明ニシテ知ヤスキ」とし、四種類目の「萬ノ形有様意シワザ」を写す声を「声ヲ以テ意形ヲウツセル」としている。胤は前の三種類において、その音とその名称との繋がり、つまり音から声への転写について述べ、次の四種類目は一歩進めて、声の機能的役割すなわち、「形、姿、心」について説明している。これは前の三種類とははっきり区別されており、言葉の成り立ちを明らかにした上で声自体の作用をつまびらかにするのがねらいであったと思われる。この区別について古田東朔(1968)は「あげられている語についてみると、いわゆる擬声(音)語と擬態語に分けた場合の区別に対応している点もあるようである。しかし、それに加えて、むしろ第四項は現在擬態語と考えられるもの以外も広く含んでいるので、前の三項で擬声語をあと的一项で擬態語とそれ以外のものも含めて扱おうとしているというほうがよいかもかもしれない」と述べている。筆者は古田氏の「擬声語、擬態語」という分類に少し違和感を感じる。胤は、音声の面から言葉の特徴をまとめようとしていた。それを特定のグループにまとめると、かえって本文の内容を正確に理解する妨げとなるのではないだろうかと思う。

ここからは四種類目の「声ヲ以テ意形ヲウツセル」音声を詳しく見てゆきたい。「音聲ニ形アリ姿アリコヽロアリ」でいう「形、姿、心」とは、例えば、

○手タヒラ田【コノ三亦開音ナリ又ハ舌ノ腹ヲヒラメ顎ニアテ、其舌ノ平ナルニタトヘタルニモアルベキカ是ニヨリテ思フニ】○舌ノタ【モ同意歟カラニテ舌ノ字舌音ニ近ク添澹等ノ字ノ舌音ニナリ。顎ノ字齒ノ字ナド各其

音ナルヲ思フベシ】○雲曇ル限潜ル溟澤含ム籠ム黒暗【コレラ皆合口音ナリ、其上クト云音ニ其意アリ】

(『鈴木胤』361ページ)

開口音と合口音それぞれに意味が込められているというのが胤の考えである。開の音を発音すると、開く、明るい、平たいといったイメージが浮かび、合の音を発音すると、閉じる、暗い、含むといったイメージが現れる。ここは、胤が声によって形が示されることを論じている所といえる。

○含【ホヰマルトモ】、脹、フクラ、袋【フモジホモジヲ唱フルトキ、口ノ外閉テ内廣ク含ミ脹ル、サマナリ、今俗フウツトフクレタリト云コレナリ】

(『鈴木胤』362ページ)

「含、脹、フクラ、袋」というもので、「フ」という音は、口を閉じ、息を口いっぱいに入れて脹らんだ袋のように発音される音であるため、それらの言葉で表示されるものの“形”や“イメージ”がこの音によって表されるということである。

○スダシノスダ、寒シ、サビシノサ【此三声モココロモ相似タル事ナリ。但シスダシハ息ヲ吸入レテ、口中ノスダシキニ象リタルカ、又酔モ其味ヒヲ声ニテウツシタルナリ】

(『鈴木胤』364ページ)

とあるように、「スダシ」「寒シ」「サビシ」この三つの声が「相似タル」としているのは、「サ・ス」には寒・澄の意があるとの理解からであろうか。「音声ニ心アリ」の「心」とは“音の持つ意味”のことであると理解する。ただし「スダシ」の場合は、息を吸い込んで口の中が涼くなる際の声であると述べている。また、「酔」もそれを味わった際の声から生じた音であるとされている。

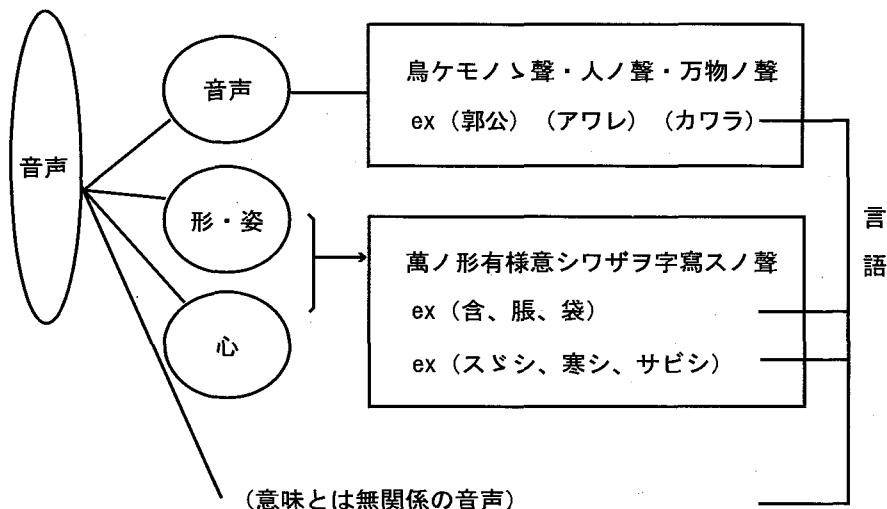
音声の中には、単にものの音を表すものがあれば、意味をあらわすものもある。また、「形、姿、心」をもつ音声以外に、意味とは無関係の音声もある。これは後に出る「心ナキ聲」である。胤のこの意識を図式化すると次のようになる。

(2)「コヽロアル音聲ト心ナキ音聲」

胤は、また音声を「心アル音声」と「心ナキ音声」に二分類している。

○然ラハ言語ノ本ハ專音聲ノ意ニヨルモノ歟。答云。音聲ヲ以テ言語トスル時ニ、コヽロアル音聲ト心ナキ音聲トアリ。ニツ共ニ言語トナリテノ後ニハ、言語ノ上ノ意アリテ、其コヽロ輒轉変化シテ万事ノ用ヲナス。心ノナシニテ、言語ノ意カヘリテ音聲ニウツル事アリ、カノ道ヽシ物ヽシノタグヒナリ。

(『鈴木胤』370ページ)



音には心のある音と心のない音があり、共に言葉となるが、心のない音の方は、言葉と成った後、逆に心を持つようになる。

「心アル音声」は前の「鳥ケモノノ聲・人ノ聲・万物ノ聲萬ノ形有様意シワザヲ寫スノ聲」の四種類「の聲」にあたると思われる。「心ナキ音声」とは、例えば「道タシ、物タシ」のような言葉を成り立たせる個々の音には言葉の意味を示す部分がなく、音声自体が意味やメージを表さない派生語をいう。この種の音声は、まず言葉として成立し、その後、音声自体が意味を持つようになる。尾崎知光（1983）はこの「コノロアル音聲ト心ナキ音聲」をそれぞれ有意的音声、無意的音声と名付けた。胤がここでいう「心」には、意味以外に「聲、形、姿」も含まれているのではないか。胤の考えを図式にまとめると次のようになる。

結 論

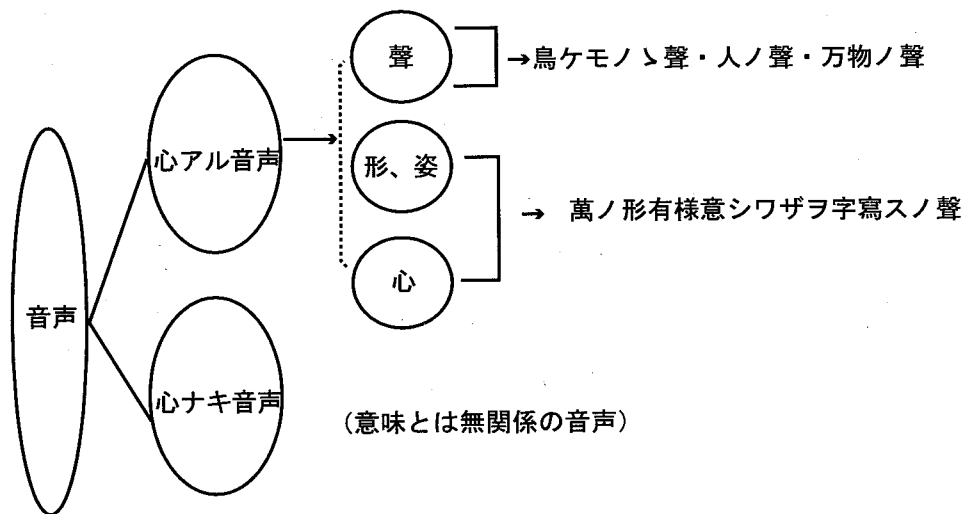
『言語四種論』における「心ノ聲」の「心」とは、言語を形成する時の人間の心の動きである。このような心の動きは、そのまま言語（「テニヲハ」）になり、また万物の名（「体ノ詞」）と結びついて言語（「形状ノ詞・作用ノ詞」）を作ることが示されている。しかし、『雅語音声考』におけ

る「心アル音声心ナキ音声」の「心」とは、万物の声、万物の形態・意味を指し、それが音声は「心アル音声」となり、ない音声は「心ナキ音声」とされている。

本稿は、以上の考察を通して『言語四種論』の「心ノ聲」と、『雅語音声考』の「心アル音声心ナキ音声」は、それぞれ「構造」と「音声」という異なる次元での分析であることを明かにすることによって、「心」＝「意味」といった単一な理解より、より豊かな「心」の意味を確認することができた。そのことによって、機能や音声などの多方面から日本語を分析しようとした鈴木胤の意図が整理され、彼の言語意識の原点を探る糸口となったのではない。

付 記

20世紀の初めにソシュールは「言語記号が結ぶのは、ものと名前ではなくて、概念と聴覚映像である。後者は、じゅんすいに物理的である資料の音声ではなくて、そうした音声の心的印刻である」と述べた（1916）。それより百年前『雅語音声考』（1816）の刊本がすでに出版され、また続いて『言語四種論』（1824）も刊行された。ソシュールと鈴木胤の言語に及ぼす音声の影響についての考え方の相似がその著書からうかがえる。鈴木胤の徹底的に物事の根本を追究する精神は、当時の日本における言語研究に多大な影響を与えたのではない。



「注」

1：時枝誠記の詞辞論は鈴木朧の理論を継承したものと評されている。

尾崎知光は著作『国語学史の基礎的研究』の中で国語学における鈴木朧の存在を大きく取り上げている。

2：「以上のやうな経過をとる表現に対して、よろこび、かなしみ等の主観的情意を、客観化せず、また概念化せず、そのまま直接に表現する語がある。その著しいものは、いはゆる感動詞であって、「ああ」「おや」「まあ」「はい」「ねえ」等がこれに属する。鈴木朧は、「さし頭はす」ところの語に対して、このやうな語を「心の聲」と呼んでゐる。心の直接的な表現で、客体化、概念化の作用を含まぬ意味であらうと思ふのである。現今文法書で説かれてゐる助詞、助動詞、接続詞、感動詞を大体これに入れることができるのである。」

(時枝誠記『日本文法口語編』岩波書店 1950 53ページ)

▲『言語四種論』『雅語音声考』についてはいくつかの版本があるが、本稿で論じようとするところについては、各本には特別に異なる点がないので、本文の引用は原則として刊本に拠る。出典は『百三十年記念鈴木朧』(鈴木朧顕彰会 1967. 9. 15)

▲読みやすさの便宜を図り、引用文の踊り字「ゝ・ゞ」を平仮名の「ゝ・ゞ」に改めた。

「参考文献」

ソシュール 小林英夫訳『一般言語学講義』 岩波書店 1940

時枝誠記『日本文法口語編』岩波書店 1950

古田東朔『言語音声考』から『雅語音声考』へ』『国語と国文学』45-2 1968

尾崎知光『国語学史の基礎的研究』笠間書院 1983

島田昌彦「鈴木朧の国語学上の業績」『文莫』No.17<鈴木朧学会> 1992